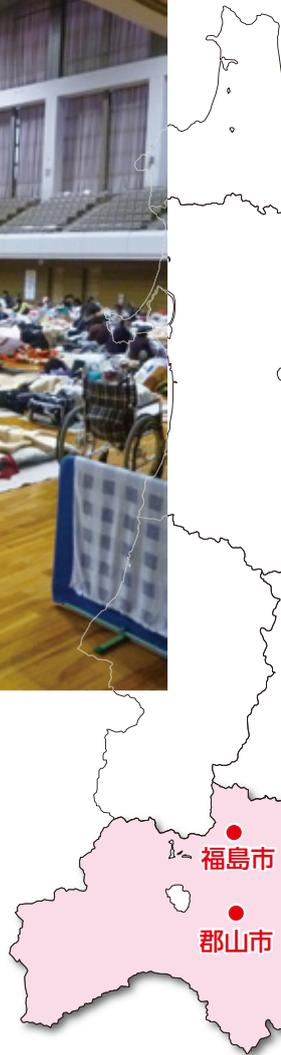


## 福島県 福島市、郡山市での活動

一見、地震の被害がほとんどないかのように見えた県庁所在地の福島市。しかし、地震と津波、さらには福島第一原子力発電所事故の影響を受けて、避難を余儀なくされた沿岸部の方々が避難生活を送っています。神奈川県支部は、郡山市にあるビッグパレットふくしま、福島市にある県立あづま総合運動公園体育館に設置された赤十字の医療救護所で、多くの被災者の方々に対して診療を行いました。

発災直後は医療体制が機能していないだけでなく、機能している病院への搬送も困難な状況であったため、本来ならば入院が必要な患者に対して24時間体制で治療や処置にあたりました。また、各地に点在する避難所でも医療ニーズが高く、救護班は巡回による診療を行うとともに、緊急に必要な薬剤の調達などの調整を行いました。避難している方の中には、家や畑のみならず、家族や親族、友人が津波に流され行方不明になっているにもかかわらず、探しに行けない状況の方も多く、話をじっくりと聞いて、少しでも気持ちが楽になっていただけるような活動を努めました。

5月17日までに、神奈川県支部として福島県へ6班、同時に、被災した地域にある日赤支部を支援するため、福島県支部に13名派遣しています。



調整員

### 福島県支部の機能回復のため

神奈川県支部 青少年係長 中島 良介

赤十字では、被災支部の機能を支援するため、全国から職員やボランティアが岩手、宮城、福島の各県支部に派遣されています。その中で神奈川県支部は、福島県支部で支援活動を行いました。

私の活動していた4月10日～13日では、救護班の派遣調整・準備や巡回診療用のカルテの準備、福島市内および福島市周辺、会津地方の避難所を担当した救護班から報告される日報集計など、様々な業務を行いました。ときには、足りなくなったカルテを避難所まで届けに行くこともありました。

現地では、神奈川県支部だけではなく、他支部から派遣されたメンバーと合同で支援活動を行うため、チームワークも必要になります。変更した事項や伝達内容をまとめ、より良い活動が展開できるよう、次の支援員へ引き継いでいきました。

医師

津久井赤十字病院 副院長 西山 保比古 やすひこ

私たちの班は、福島県あづま総合運動場で活動を行いました。門前では放射線量の計測など物々しい雰囲気でしたが、避難されている方々は予想外に明るく、秩序正しい生活を送られていると感じました。救護所では、いわゆる「風邪」の患者が非常に多く、手持ちの薬剤が不足するほどで、インフルエンザも数名確認されました。今後は気候が変わり、さらなる衛生面の充実が重要です。また、精神面を含めてすべてを助けあい、現場に行かなくてもできることを考え行い、一刻も早く被災者の方々が普通の生活に戻れることを切に望むばかりです。班長として活動を共にした班員に感謝すると同時に、被災者の皆さまには心よりのお見舞いと早期の復興をお祈り申し上げます。



看護師

横浜市立みなと赤十字病院 看護部 武藤 久美子

印象的だったのは、ある病院から搬送されてきた27名もの患者を、機能している病院に搬送した日のことです。患者さんたちは、救護所に来る前の2日間、何の看護も受けられず、体はひどく汚れていました。搬送までのわずかな時間で少しでも体をきれいにしたくても、私達だけでは手が足らず、あきらめかけていました。



そこへ同じ施設内に避難している数名の看護師、看護助手さんたちが名乗りをあげて手伝ってくれたのです。おかげで患者さんはピカピカになりました。自分たちも被災者であるにもかかわらず、他者を思いやれるその姿に、医療者の志の強さを感じた一場面でした。

薬剤師

横浜市立みなと赤十字病院 薬剤部 平田 周祐 しゅうすけ

私は、福島県支部を拠点とし、福島市内の避難施設を1日3箇所巡回診療する救護班に派遣されました。公民館や体育館が多く、診療所の設営、診療2時間、撤収、移動と目まぐるしい動きをしていました。

診療は1日に70名前後で、患者の様態把握や服用していた薬を聞き出して、手持ちの薬で処方するか、近隣の調剤薬局に対応してもらうことが主な役割でした。

初日最も困ったことは言葉で、福島の人たちは、文頭や文末に「はあ」を使うことがあります。避難所で「はあ、えんがみた」（もう、ひどい目にあった）と言われたときは正直戸惑いましたが、昼夜言葉の壁を乗り越え、最良の医療を提供できたと思います。



ボランティア

神奈川県救護赤十字奉仕団 兼田 加代子

福島県支部支援の活動に参加したのは、震災から1カ月経った頃でしたが、まだ震度6弱の余震が起きている時期でした。被災地の支部という事もあり、どなたも休む事なく働かれており、栄養が偏りがちな簡便な食事で済ませているとのことで、心身への負担が大きいように感じました。

沢山の方々に手を差し伸べていただくためには、職員の方々が元気でなければなりませんので、不足しがちな栄養素が補え、さらにホッとできるようなメニューを考えて、お食事をご用意しました。

糧食支援という活動は初めてでしたが、日頃から訓練や研修などを重ねてきたおかげで、無事活動することができました。

